

して活やくしておられるが、その私信の一部を引用させていただく。“鈴木吉五郎氏が昭和6年屋久島を訪れ、島の南東にある小田汲谷をすぎた時、サツキの花変りのもの一本を見た。その一枝を折って持帰り、中井先生にお見せしたところ、サツキの変りものとして認められよいので、特に命名すべきものではないとのことであった。小田汲谷のサツキゆえオタクミツツジとして出した。” 鈴木吉五郎、文五郎氏経営の春及園春期園芸案内（1937年4月）8頁に次のような記事がある。“オタクミツツジ（小田汲ツツジ）サツキに似た一種で同じ丈、極く細狭葉で冬期の紅葉の美しい品、花は不整ですが赤色五輪、屋久島採集の新品です、原地僅かに一本を見たして、その枝を挿して繁殖せしめたものです。” 以上のことから寺崎氏の図のものはオタクミツツジとよばれ、屋久島産のサツキの奇形品である。現在立性の本来のものと、それから枝変りでできたと思われるややしだれる性質のものが栽培されている。以上のことを調べるにあたって、お世話になった荒川一郎氏、榎本一郎氏に感謝します。（東京大学理学部植物教室）

*Rhododendron indicum* (L.) Sweet f. *otakumi* Yamazaki f. nov.—*Rhododendron lateritium* (Lindr.) Planchon var., T. Terazaki, Zoku-nihon-shyokubutsuzuhu t. 2642 (1938).

Folia linearia 15–25 mm longa 2–3 mm lata atroviridia. Corolla 5-secta, lacinias oblanceolatis 25–30 mm longis 7–8 mm latis mox deciduis. Stylus staminisque steriles.

Hab. Kyushu, Yakushima, cult. in Tokyo (Fusako Yamazaki, Mai. 20, 1964).

□中尾佐助：栽培植物と農耕の起源 岩波新書 No. 583. pp. 192 (1966). まことに異色の本である。まず今までの栽培起源論のような西欧中心の思想でなくまた個々の植物にばらばらにした起源説ではないことが大きく違う。過去20年著者が探検をした広い地域での身についた智識がその背骨になっている。その点では戦前の日本の勢力圏とが学問的に癒合して素地を形づくっているのはまことに喜ばしい。それを踏んませた上で、思考法式として主食を主体とした農耕文化複合を浮び上がらせたことはまことに鮮やかであった。マレーシアから太平洋へのびる熱帯降雨林には発生した根耕農耕文化、西アフリカから東漸する草地利用のサバンナ農耕文化、それとサハラ砂漠をへだてて同じく乾燥地帯に出現した地中海農耕文化を識別した。そして第一の文化の地下部の利用と種子の不採用；第二の文化の雑穀及びマメという夏作物；第三の文化のムギを中心とする冬作物という顕著な特質を浮彫にした。それに附隨する副次的な栽培種や習慣などにもするどい解析を加えている。それとくらべると、東亜にでてくる照葉樹林文化は主食物の点で弱く、またイネの栽培はサバンナ農耕文化の東漸の結果のように受けとれる辺はいささか難解に見える。また新大陸農耕文化が少々軽く扱われたのは、著者が将来手をのばされるためと期待をしておきたい。英訳されたらさだめて世界的に注目をあびる事であろう。とにかく一読を要する文献としておすすめする。（前川文夫）